

令和 4 年度 点検・評価報告書

学科名・専攻名 看護学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	看護学科の教育課程は、保健師助産師看護師学校養成所指定規則に則った看護師及び保健師の養成カリキュラムに加え、看護学科カリキュラム・ポリシーに基づいた授業科目を配置している。令和2年度の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令に基づき、カリキュラムの見直し、変更等を行い、令和4年度からの入学生に適用を開始した。 さらに、令和4年度から、全学として、数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）を開始した。本看護学部の特徴として、数理・データサイエンス・AI教育プログラムとの整合性を取りながら、象徴科目である「看護と情報Ⅰ～Ⅳ」（1～4年次）の内容の充実を図れるよう検討している。	「看護学部新型コロナウイルス感染症対策ガイドライン」を学生に示し、各ガイダンスでその遵守を周知した。 令和4年度は、原則対面授業を行うことができたが、新型コロナウイルス感染者や濃厚接触者となった学生へも配慮し、可能な限り学習の機会が確保できるよう授業録画の配信、ハイブリッド授業の実施、課題の提示などを適宜実施した。 演習科目は安全を確保した上で、実習棟で実施した。看護技術の演習においては、学生の演習実施時に互いにビデオ撮影を行い、撮影動画を見ながら改善していく方法を取るなど、学習効果が高い方法を取り入れた授業もあった。 臨地実習は、COVID-19感染状況に応じた実習施設の方針を確認しながら、可能な限り臨地実習の受け入れをお願いし、臨地実習が難しい場合は実習指導者と協議を重ね、当該科目の目的、目標に到達するために適した様々な方法（リモートによる事例の提供や実習指導等）で実施した。施設からの要請で実習前にPCR検査を行う場合、施設と協議し、場合によっては大学が費用負担して検査を行ったうえで臨地実習に臨んだ。	成績評価においては、シラバスにその基準を明記し厳格に実施するとともに、教務委員会、実習委員会、学生部委員会等において、学生の成績及びこれからの学生の学習への対応等について審議検討している。特に、前年度以前や今年度の前期必修科目に未修得科目がある学生に関して、クラス担任やアドバイザー教員が情報共有し、個別面談を設けて後期の学習意欲を高める指導を行った。成績不振者への個別面談では、本学部の再試験制度を再度確認し、当該学年の必修科目を確実に修得することが重要であることを意識づけるとともに、コロナ禍において孤立しがちな学生の心理面を考慮して学習支援を行った。 後期の成績発表後は、再試験対象外となった必修4科目以上不合格者について、クラス担任による面談を実施し、履修状況の確認や生活面での相談も含めた対応を実施している。 また、3～4年次の開始時には、卒業要件に必要な科目の履修を確認し、必要単位が修得できるようアドバイスをを行っている。	第3期中期計画N2022の理念・目的に基づき、学生にDPを達成するための指標や方法を示し、入学から卒業までの学びの達成度について、外部アセスメント（PROG-N）を活用して定期的に測る仕組みを導入し、実施している。2年次生は6～7月に、4年次生は11月に実施し、調査結果とDPを関連付け、学習成果を可視化できるようにした。 また、DPの達成度を評価するための卒業生調査を実施している。令和3年度は卒業生105名を対象に実施し、DPの達成度と卒業後社会に必要とされる能力の分析を行い、看護学部内で共有した。令和4年度も卒業生70名を対象に実施している。 また、半期毎に各学年のGPA分布図を作成し、学生は相対的にどの位置にいるかを確認し、教員は学生指導に活用し、特待生の選定にも活用している。 各科目担当教員は、双方向の授業を行う中で随時、学生の学習状況を把握、評価し、学生自身が主体的に学習に取り組むことを支援する活動を、全教員の関りをもって実施している。 今年度より、看護師および保健師の国家試験対策や学習支援を企画、実施する学習支援委員会を設け、計画的に学修支援を行った。特に4年次は、対面での国家試験模擬試験、外部講師による講座を	今年度から新カリキュラムを開始することができた。 学部内に教務委員会と実習委員会を置き、教務委員会で各科目の点検・評価を行い、実習委員会で各看護学実習内容の共有、点検、評価を行っている。教務委員会では、非常勤講師が担当する多くの科目について、専任教員で担当を割り振り、非常勤講師と連絡及び調整を図りながら内容を確認している。特に臨床現場の医師が担当する専門基礎科目については、国家試験出題傾向を踏まえた内容の精選、依頼を行った。実習委員会では、COVID-19により臨地実習が行えず、学内実習やオンライン実習に切り替え、その実践内容を教員間で共有するためのFDを開催するなど学修到達目標に向けた取り組みを行った。 また、学修成果の可視化のため、2年次と4年次に外部アセスメント（PROG-N）を取り入れている。学生全体に共通する弱点部分を強化するために専任教員間で結果を共有し、担当科目内で強化を図った。

令和 4 年度 点検・評価報告書

				定期的に取り入れ実施した。卒論ゼミ教員が担当学生の学習状況を確認するとともに、12 月模試結果を受けて、成績が伸び悩んでいる学生については、学習支援委員が面談や連絡を行いサポートした。	
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 カリキュラムの一部改正において、在宅看護及び地域包括ケアの進展を見据えた改正を行ったが、開学時より 1 年次において訪問看護ステーションにおける現場訪問を取り入れていたため、現状の実施内容を発展させて、地域包括ケア実習として科目立てすることができた。 また、数理・データサイエンス・AI 教育プログラム（リテラシーレベル）の実施についてもいち早く取り組むことができ、本学部の特徴とすることができる。	【長所】 どの授業形態においても、アクティブラーニングの実施や VTR を用いた実践的な演習など、学生の学習を活性化する教育が行われている。 COVID-19 感染拡大で緊急事態宣言が発出されてすぐに「看護学部新型コロナウイルス感染症対策ガイドライン」を策定し、学生への健康観察の周知を図っており、安全の確保が遵守できている。	【長所】 年間を通じて成績評価および単位認定については、大学の成績、履修に関する規程等に基づき適切に行われた。	【長所】 学修成果を可視化するための外部アセスメント（PROG-N）を 2, 4 年生で実施し、DP を関連付けた分析結果から本学学生の強み・弱みを確認できる。	【長所】 教育課程の見直しを踏まえた新カリキュラムを適用できた。また、教務委員会と実習委員会の両委員会で、適宜情報交換や点検、評価を行い、学科教員会に報告している。
	【特色】 1 年次の地域包括ケア実習は、学修の初期段階で地域や生活の中での看護を実習することとなり、看護に対する視野が広がり、地域包括ケアを体感的に学ぶことができ、3 年次以降の応用実習においても生活者の視点を活かすことができる。また、看護師としてのキャリアデザインを描く際のモデルを持つことができる。	【特色】 「看護学部新型コロナウイルス感染症対策ガイドライン」を遵守しながら、授業、演習、実習が円滑に行えている。特に、看護技術演習などは学生間、教員・学生間の接触が増えるため、人数と時間の制約をして、濃厚接触とならないよう、すべての教員（専任教員、臨床教員、実習教員）が協力しながら科目運営ができています。	【特色】 成績不振者への面接、指導等は、学生部委員会で検討し、クラス担任やアドバイザー教員が適切な時期に個々に合わせた方法で指導する体制が整っている。	【特色】 学生の状況等について、教務委員会、実習委員会及び学生部委員会等で検討するとともに、外部アセスメント（PROG-N）を活用し把握及び評価することで、より適切な学習効果の把握が可能となる。 今後は卒業生調査による DP の達成度を評価し、教育改善につなげることができる。	【特色】 看護学科は各年次に看護学実習が配置され、順序性をもって学修を積み上げる形になっているため、講義・演習科目と実習の連携が特徴である。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 今年度より対面授業が可能となり、演習機会や臨地実習は増えたが、COVID-19 により急な臨地実習の中止や変更が続いたため、看護の基本である患者・利用者とのコミュニケーションや現場から学ぶ機会は十分とは言えない状況が続いている。そのため、学生のモチベーションや学修進度は差異が生じている。	【問題点】 昨年度に引き続き、新型コロナ感染者や濃厚接触者への配慮を行いつつの授業運営であり、学修進度の差異、看護技術の未修得などに課題がある。	【問題点】 評価基準や試験制度についての理解が不十分な学生がいる。 また、令和 4 年度入学者より、3 年次への進級要件が設けられ、再試験受験要件も変更となったため、条件の違う学生への対応をきめ細かに行う必要がある。	【問題点】 学習支援委員会による国家試験対策を行ったが、看護師および保健師国家試験の合格率は目標に届いていない。成績下位者を抽出した対応も考えていく必要がある。 外部アセスメント（PROG-N）結果を受けた授業の取り組み、卒業生調査の結果を受けた DP 達成度の可視化など、少	【問題点】 今年度は対面授業や臨地実習可能な状況となったが、過去 2 年間の対面授業や臨地実習の中止に伴い、学生による学修進度の差異が生じている可能性が高い。

令和 4 年度 点検・評価報告書

				しずつ本学看護学部教育状況が明らかになりつつあるが、卒業生もまだ少ないため、第三者からの評価の蓄積が少ない。	
	【課題】 臨地実習が不十分な場合、対面授業でのシミュレーションを用いた学内技術演習の工夫や、実習施設の協力を得て行うリモート実習など、今年度も臨機応変に対応してきた。しかし、臨地実習で得られる知識には至らないため、今後も実習施設等の協力を得ながら、知識や技術獲得の機会を増やすこと、また、対面での講義・演習・実習を増やし、学生のモチベーションを維持し、学びを深めていくことが必要である。 データサイエンス関連科目の履修について、「看護と情報Ⅰ～Ⅳ」(1~4年次)の内容の充実を図る必要がある。	【課題】 学生による学修の差異が生じていることを想定し、補習授業や授業外の学習支援の機会を設け、必要な学生へ活用を促す必要がある。 ハイブリッド授業の実施、必要な機材の充足、教員がそれらの機材を活用するために必要な技術を修得することも課題である。	【課題】 学生の成績に関する評価、単位認定及び学位授与の適切な措置等について、全学生が十分に理解できるようガイダンスの充実を図る必要がある。さらに、授業が進行してからも、タイムリーな指導やリマインドを行うために、授業時間外の空きコマ等を活用して、教員と学生が連絡・相談できる時間を設けることを検討する必要がある。 また、現行カリキュラムの学生が、必修科目を配当年次に確実に修得するよう支援することが前提ではあるが、令和4年度のカリキュラム改正以降において、単位未修得の科目の履修に際し、不利益が生じないように配慮する必要もある。	【課題】 当面の課題は、看護師および保健師の国家試験合格率を100%あるいは全国新卒者並みにすることである。そのために、1年次からのより詳細な支援計画と対策の実施、成績下位者への対策が必要である。 卒業生調査の結果を分析するとともに、今後は就業先の管理者、指導者への調査も考慮し、本学卒業生のDP達成度について明らかにしていく必要がある。 また、学生の外部アセスメント(Prog-N)結果や卒業生調査の結果を共有するだけに留まらず、教育改善につながる知恵や工夫も共有し、DPの達成および深化を図る必要がある。	【課題】 新カリキュラムの実施による教育評価を適宜行う必要がある。
根拠資料名	・2022年度 学生ハンドブック ・第5回数理・データサイエンス・AI教育推進委員会資料（令和5年1月27日開催）	・看護学部新型コロナウイルス感染症対策ガイドライン ・シラバス ・2022年度 看護学実習の手引き	・2022年度 学生ハンドブック ・諸規則諸規定 ・シラバス ・2022年度アドバイザー制（看護学部）	・東京情報大学第3期中期計画N2022(2019~2022) ・2022年度 学年別看護師国家試験対策模試日程 ・2022年度国家試験対策工程表 ・外部アセスメント(Prog-N)結果 ・卒業生調査報告書	・外部アセスメント(Prog-N)結果について

令和４年度 点検・評価報告書

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	ホームページで看護学部を受け入れ方針について紹介するとともに、「看護と情報の連携」を紹介する看護学部の冊子を作成して配布した。 オープンキャンパスでは、看護基礎教育として、どのような学習をするかを演習やミニ講義を通して紹介し、入試制度について説明するとともに、個別相談ブースを設けて対応した。 入学選抜制度は、総合型選抜(未来創造型、Ⅰ期～Ⅲ期)、学校推薦型選抜(公募制推薦、指定校推薦、併設校)、一般入試(Ⅰ期、Ⅱ期)、共通テスト利用選抜(Ⅰ期～Ⅲ期)、社会人選抜を設け、多様な学生を受け入れることに努めている。	両学部合同の入試・広報委員会を毎月開催し、入試広報活動の全体像を理解し合える体制を整備している。委員会で検討した内容については学科教員会に提示し、入試制度の変更等については、学科教員会等で意見を聞き、入試・広報委員会での審議に反映している。 入試科目の問題作成に関して、総合型選抜、公募制推薦型選抜の口頭試問については、入学時の基礎学力を評価できる設問を設け、出題範囲をホームページや入試要項で周知している。 一般入試科目の得点状況を翌年の問題作成に反映するために、入試問題作成に関して、入試問題作成委員と入試広報課、作問担当で話し合いを持ちながら進行している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・オープンキャンパスでは、看護基礎教育への関心が高まる「プログラム」を準備し、入試広報担当の教職員が中心となって企画・運営を行っている。 ・入試制度については、ホームページの充実を図るとともに、受験生の希望に沿った受験形態を選択できるようにしている。	【長所】 ・総合型選抜、学校推薦型選抜の合格者に対して、入学前教育(受講希望者)を実施し、入学までの期間に学習習慣がなくならないようにサポートを行っている。
	【特色】 ・総合型、推薦型選抜入試を考えている高校生が多く、複数回来場する高校生は、入学後の学生生活について、具体的な質問をするようになる。 ・授業料が減免される特待生制度を希望する受験生には、全体説明と個別相談で対応している。	【特色】 ・組織的、伝統的にオープンな学習環境を準備しているので、受験生、合格者に対する小まめな対応を行っている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・在校生が主体的にオープンキャンパスの運営に参加し、より高校生のニーズに合った対応を目指しているが、積極的で充実したキャンパスライフを送っている学生をスタッフとして採用できていない。	【問題点】 ・受験情報の収集、受験から合格発表、入学手続き、入学前準備等の受験生への時系列の対応窓口の調整が必要と言える。
	【課題】 ・定員を満たすまでの入学者数に至っていない状況が続いており、看護学部の認知度を高める活動と学生自らが看護学部で在籍することの誇りと自信を持てる教育・キャンパスライフのサポート体制を整える必要がある。	【課題】 ・入学式までの期間に、来学する機会を設けて、ユニフォームや iPad の説明等を行っているが、教務委員会や学生教務課が中心となって対応しているため、入試・広報委員会としての対応が不足している。
根拠資料名	看護学部「看護の日」 https://www.tuis.ac.jp/topics/healthcare-10610/ 入学者選抜試験情報 https://www.tuis.ac.jp/entrance/department/ アドミッションポリシー https://www.tuis.ac.jp/entrance/department/admission-policy_nursing/	入学準備情報 https://www.tuis.ac.jp/entrance/new-student_guidance/

令和 4 年度 点検・評価報告書

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づき領域を編成し、教員配置を行っている。随時、教員組織編成について、学部教員会において示している。新任教員に対してはオリエンテーション時に組織体制について説明している。	カリキュラム改正により、令和 4 年度より、8 看護学領域を 4 分野に再編成した。基盤看護分野（基礎看護学領域）、成人高齢者看護分野（成人看護学領域・高齢者看護学領域）、成育看護分野（母性看護学領域・小児看護学領域）、地域看護分野（精神看護学領域・在宅看護学領域・公衆衛生看護学領域）とし、教員の専門性を充実し教育・研究活動が推進できるような体制とした。令和 5 年度も同様の体制で活動する予定となっている。	令和 3 年度の退職者の補充のため、専任教員（任期制）を 4 名採用し、専任教員組織の体制は概ね整ったが、1 名の教員の欠員が続いている。臨床教員は 6 名（令和 3 年度）から 4 名となり、関係機関、関係者を通して募集したが、補充されていない。 教員の採用・昇任については学部の全教授による厳正な審査を実施している。新規採用教員の面接については、今年度より専門分野の模擬講義も審査内容に加え教育方法・内容に関する評価も実施している。 任期制教員に対しては学部の教授および総合情報学部の学部長にも加わってもらったうえで面接を実施し、多面的な評価、および専任化へ向けた助言を行っている。	実習指導者を交えたファカルティ・ディベロップメント（FD）を 2 回開催し、教員および実習指導者の教育の質向上に向けた活動を行った。各回のテーマは「コロナ禍による実習内容の変更に伴う新人看護師の看護実践への影響」、「今どきの若者との付き合い方」とし、最新の教育環境、学生の特徴をふまえた指導について教員・実習指導者と共に学習、意見交換を行った。 また、教員の質の向上を図るため、学期ごとに「授業評価アンケート」を行っている。 学部と実習施設との連携を強化し実習指導の教育効果を高めるために、臨床教授制度を設けた。臨地教授制度は令和 5 年度から開始する予定である。	学部の教育体系、科目構成および将来構想をふまえた教員配置を行っている。 教員の評価についてリサーチマップに研究業績、教育業績、社会活動の業績を登録してもらい活動状況を確認した。また、今年度から学部年報を作成し、教員の活動について確認している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・本学の公式ホームページに公開している。	【長所】 ・組織編成を 8 領域 4 分野として活動することにより、専門性の高い教育・研究活動につながる。	【長所】 ・教員募集は公募により、採用人事を実施している。	【長所】 FDを実施することで、教員と実習指導者との共通認識ができ、学生への指導体制の強化が期待できる。 授業評価アンケートの結果に基づいて、学生へ回答を行っている。 臨床教授制度を導入することにより、大学と臨床が適切に教授され教育の質が高まる。	【長所】 ・教員の業績について学部長、学科長が確認している。 ・教員の研究活動において共同研究者の可能性が検討できる。
	【特色】 ・看護学部開学より分野・領域に活動について委ねられている。	【特色】 ・分野の再編成により、新カリキュラムに対応した教育が可能となる。特に実習にお	【特色】 ・教員採用・昇格は「教員資格審査基準」に基づいて検討している。	【特色】 学科実習委員会が教員、実習指導者が抱える共通の問題に焦点をあてて、FDのテー	【特色】 ・看護学部の将来構想にふまえた人事計画により、教員の昇格について検討

令和 4 年度 点検・評価報告書

		いて、領域間の連携が強化され効果的な実習指導が期待される。 ・ベテラン教員が若手教員の研究活動に多面的な視点で関わることで研究活動の活性化につながる。		マを検討しオンラインで定期開催している。	している。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・分野・領域、教員により組織運営にバラツキがあるため、組織編成の方針について確認することが必要である。	【問題点】 ・教員組織の適正化に向けた体制を編成することで、教育活動において専門性を活かした活動が出来ているが、研究活動についてその効果が発揮されていない。	【問題点】 ・専任教員が 5 名、臨床教員 2 名が退職となる。しかも採用 2 年未満の准教授 3 名が含まれている。毎年、教員の入れ替りが多く、教員体制の不安定さが懸念される。 ・令和 5 年度は専任教員 3 名、臨床教員 1 名の補充ができていない。	【問題点】 ・充実した F D の継続に向けて、テーマについて検討する必要がある。 ・臨床教授制度が創設されたが、導入に向けた準備が必要である。	【問題点】 ・教員の研究活動の時間を確保するための業務内容の検討が必要である。
	【課題】 ・教員会、新任教員ガイダンスにおいて組織編成の目的、運営のあり方について確認する。	【課題】 ・分野ごとに研究活動が進められるような活動を提案してもらい、分野・領域間で研究の協力体制が構築できるようにする。	【課題】 ・新任教員のヒアリングを定期的を実施し、期待する教育活動・研究活動・組織活動のエフォートと現状について確認し、改善点を明らかにする。 ・教員の欠員について継続して公募する。	【課題】 ・F D 終了後の実習指導者へのアンケートは引き続き行うとともに、臨床教授制度により、臨床教授から提案してもらえるような体制を整える。 ・臨地教授制度の導入に向けて、提携する病院の選定、提携するための計画を策定する。	【課題】 ・慢性的な教員のマンパワーの不足により、助教を中心に教員の研究活動にあてる時間が限られている。
根拠資料名	学生ハンドブック 2022	学生ハンドブック 2022	2022 年度任期制教職員面談記録 2022 年度教授会議事録・資料	2022 年度実習指導者連絡会議資料 2022 年度実習委員会議事録・資料 2022 年度教授会議事録・資料	Research map 2022 年度看護学部年報